

ゾトーンならではのノウハウを満載し、さらなる高みに挑戦した
新しい最高峰ケーブルが誕生

Zonotone Shupreme シリーズ



Audio Accessory
 『季刊・オーディオアクセサリー139号』
 より抜粋

新たな最高傑作=新設の「アクセサリー誌機賞2011」で
 栄えあるグランプリを受賞。
 さらに、ZONOTONEブランドが
 特別開発大賞も受賞!

ZONOTONEの新たなTOP-ENDケーブル、
 「Shupreme(シュプリーム)シリーズ」

「ピュア&エネルギーへのあくなき挑戦」をポリシー
 に掲げるZONOTONE、渾身のプレミアムグレード
 「Shupremeシリーズ」が、遂に完成した。開発
 者の長いピュアオーディオ歴とケーブル開発歴
 に裏打ちされた匠(マイスター)の技術に、新たに
 「迫真のプレゼンス」という音楽再生への情熱
 を込め、ハイエンドオーディオならではの新たな
 次元の究極伝送を目指した待望のケーブルである。す
 でに数多くのオーディオ評論家諸氏からも絶賛を
 受ける、その魅力を余すところなくご紹介する。

シュプリーム、
 もう、これ以上は
 ないのかもしれない。

レポート
 オーディオ評論家
井上千岳
 Chitake Inoue



5人のプロが語る

ZONOTONEの 新たなTOP-ENDケーブル 「Shupremeシリーズ」の魅力

比類のないケーブル構造と驚嘆に値する音。ゾトーンが生んだ新たな集大成モデル、
 シュプリームシリーズに、いち早く触れた音のプロフェッショナル達が、その魅力を語る。

●オーディオ評論家
藤岡 誠



ゆとりと安らぎの実に懐が深い音
 分解力に優れ際立つ制動力を備える

「7NSP・Shupreme1」はスピーカーケーブル。「7NAC・Shupreme1」
 はインターコネクトケーブル。早速、自宅を試聴。
 前者は外径φ26mmの極太。今回は、全16芯の導体の全てを接続し
 て試聴した。敢えてひと口でいえば、聴こえにゆとりと安らぎ感がある。わ
 ざとらしい音質・音調はなく、雑味は一切を排除した滑らかさがある。独
 立導体を分配する、ハイワイヤリング接続の試聴は残念ながら今回できな
 かったが、その場合でもきっと、ゆとりと安らぎの音を聴かせるに違いない。い
 ずれにせよ、実に懐の深い音と、切り売りOKを含め、多機能なスピーカ
 ーケーブルである。
 後者も、インターコネクトケーブルとして極太。RCAタイプもあるが、今
 回はXLRタイプ(ノイトリック社のプロ用)を試聴。音で印象的なのは、コン
 トラバス、大太鼓、ピアノの左手方向などの低域制動力が際立って強力で、
 良好な質感を持つことだ。中域から高域方向も高透明で高分解能。高
 度な装置ほど、その本領を発揮するだろう。

●オーディオ評論家
貝山知弘



ハイブリッド構造を巧みに生かしきり
 思わず唸るクオリティを実現した

私が評価するケーブルは、企画の意図と実際の音質が一致している製
 品である。ゾトーンのケーブルは、その意味で私を裏切ったことはない。
 このブランドが実践しているハイブリッドのケーブルは理に適ったものだが、
 実はなかなか難しい側面もある。再生システムのグレードが上がると分解
 能や解像度が向上し、音の細部の表情まで分かるようになる。その時
 に最も気をつけねばならないのは付帯音の存在だ。ハイブリッドケーブルは、
 分解能と力感のバランスは取りやすいが、純度の異なる導線は付帯音
 がしやすい構造でもある。他社のハイブリッドケーブルには、この穴にはま
 った製品がいくつもある。しかし私が聴いた限り、ゾトーンの製品で付帯音
 が耳についた経験は皆無なのだ。それが素材や製造工程の管理による
 のかどうかは分からないが、試聴段階で前園氏の耳の確かさが活きてい
 ることは間違いないだろう。私のシステムで試聴したShupremeシ
 リーズのなかの最高傑作はラインケーブルであった。特にプレーヤー(DAC)~
 プリアンプ間でのRCAケーブルのクオリティの高さには思わず唸った。

●オーディオ評論家
林 正儀



感嘆すべき比類なきリアルな表現
 これは陶酔の領域に達したといえる

これまでのシリーズとは一線を画す、トップエンドケーブル「Shupreme」
 が、第一回「アクセサリー誌機賞」のグランプリ受賞に輝いたことは、た
 だの偶然とは思えない。開発から1年、前園氏の火のような情熱が呼び
 寄せたものだ。運命の糸という大袈裟だが、グランディオやマイスターシ
 リーズで築き上げた高みからさらに大きく羽ばたき、陶酔の領域ともいえるフラ
 グシップサウンドを手にしたのである。
 大河のようなとうとうる音の流れと、構築の緻密さは比類がない。リ
 アルさにひたすら感嘆するという言葉しか浮かばない。「Shupreme」の秘
 密はどこにあるのか。今回はインターコネクトとスピーカーケーブルだが、
 帯域別に綿密に配置された新5種のハイブリッドや中空パイプによるエア
 構造という大胆なチャレンジに注目したい。特に独立16芯の導体を有す
 る7NSPのスピーカーケーブルは例を見ないウルトラ極太であり、存在感
 に圧倒される。このクラスで切り売り対応なものゾトーンらしい配慮だ。
 電源ケーブルへのトライが待ち遠しい。

●オーディオ評論家
福田雅光



新導体と技術の集大成で大きく飛躍
 従来にない抜群の描写力を獲得した

ゾトーンが創業して4年、これまでの集大成と新しい導体素材の投入
 を加えた、新しい次元となるゾトーンのフラッグシップモデル「Shupreme」
 が誕生した。スピーカーケーブル、XLRケーブル、RCAケーブルである。
 音質性能、構造技術として、その代表格になるのがスピーカーケーブル
 だ。9.5スクアの極太導体を採用しながら、極めてバランスがよく、高SN
 比で、従来にはなかった強力なエネルギー、解像力を実現。抜群の静寂
 感とコントラストの高い立体的な描写力があり、これにはアンプをグレードア
 プしたような効果がある。重低音の響きを引き出す質感や、素晴らしいリ
 ニアリティがあり、高域特性も繊細で高度に備える。
 インターコネクトケーブルは、特にXLRケーブルの性能が高い。透明度
 が高く、高解像度基調の性質を備え、ダンピングの効いた中低域を表現。
 力強くニュートラルな音質で、帯域の広い写実調の正統的な性能を特徴と
 している。RCAケーブルはプラグの違いによる変化はあるが、XLRに準じ
 た音質である。

●株式会社トックレコーズ 代表取締役
金野貴明



進化し続けるゾトーンサウンド、匠の技が光る存在感あるケーブル群

新作の「Shupreme」シリーズは、上品で柔らかく、クラシックなどにマッチ
 ングした広がる空間再生がもっとも魅力的な従来の「Grandio」「Meister」シ
 リーズに対し、特に中央に定位された楽器帯が前面に迫り出てくるような「力
 強さ」が印象的です。しかも、中低音域の馬力が増しているにも関わらず音色
 が暗くならず、超高音域までスムーズでまろやかに伸びています。通常の多
 芯構造では緩みがちな、バスターやウッドベースなども一番美味しい帯域を
 十分に再現し、適度なスピード感とダイナミックで明確な音色を再現しており、ジャ
 ズ、クラブミュージック、ロックなど様々なジャンルにもハマってくと感じています。
 これは紛れもなく「線材の配合バランスが優れている」からできる匠の技によ

う。中低音域のことばかり褒めましたが、もちろん従来のシリーズ同様、シンバル、
 バイオリン、女性ボーカルなどの中高音域の再現に対して、嫌なピーク感を出
 さず、潤いと艶のある「ウェットサウンド」を維持しています。どのシリーズに
 対しても言えますが、いい意味でスピーカー、アンプ、プレーヤーなどに匹敵する
 ほどの「存在感」がありますね。エントリークラスでも、ハイエンドクラスの機
 器に使用しても、きちんとゾトーンサウンドを体感できてしまうのですからびっ
 ですよ。前園氏の飽くなき闘いと、今回採用している特殊合金ハイブリッドとい
 う新たな試みが、更なるゾトーンサウンドに魅力をたらしていくと楽しみです。

ゾノトーンは今年で創立4周年を迎えた。わずか4年というまだ短い歳月だが、その間にオーディオの世界で築き上げた地位は無類といってもいい。わが国でもほとんど唯一ともいえるハイエンドケーブルブランドとして、ユーザーや関係者から絶大な信頼を寄せられている事実が、それを物語っている。音質についてはすでに随所で評されているので、ここでは主に、技術的な側面からその核心に迫ってみることにしたい。

●ZONOTONEのポリシー
オーディオケーブルを極め尽くす
Shupremeの核心に迫る

ゾノトーンのケーブルは、初めから極めて高い完成度で登場した。それは主宰者、前園俊彦氏の20余年にわたる経験が

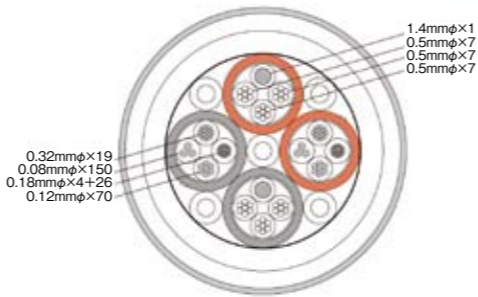


7NSP-Shupreme1

¥231,000 / 2mペア
スピーカーケーブル

7NAC-Shupreme1

¥157,500 / 1mペア(RCA)
¥168,000 / 1mペア(XLR)
インターコネクトケーブル



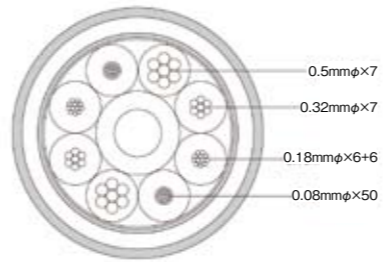
<NEW DMHC-Quadri構造>

- 超高純度7NCu・新5種ハイブリッド/シールド付 極太2芯結合使用(赤赤・黒黒)9.5スケア×2
- バイワイヤリング使用(高域・赤黒ドット付)(低域・赤黒ドットなし)
- 厚手ロジウムメッキによるY-B端子付・標準2m×2
- 切り売り(1m~)端子別売

4芯を2芯ずつ帯域別に設計。究極のパワー伝送を目指して開発された、文字通り超音級のスピーカーケーブル



スピーカーケーブル7NSP-Shupreme1の構造模式図



<NEW DMHC構造>

- 超高純度7NCu・新5種ハイブリッド 独立8芯・集合アインレット・2.5スケア×2 / 3重シールド●プラグ接点はロジウムメッキ
- 大切な極微信号に関しても、伝達ロスゼロを目指して開発された最高峰のインターコネクトケーブル



インターコネクトケーブル7NAC-Shupreme1の構造模式図

●シュプリームへの新たなこだわり
至高の上のさらなる高みを極め
異次元の再現性へとさらに進化

これ以上に進化のしようがないかに見えたゾノトーンだが、求めれば上には上があるものだ。自ら作り上げた最高の存在を、さらに上回る製品が出現してしまつた。いま絶賛を浴びている、Shupreme(シュプリーム)がそれである。

本来ならShupremeとするところである。それを「h」の1文字を入れて英語にはないShupremeとしたところに、面目躍如たるものがある。「h」はhighの意味だという。shupreme(至高)の上の、さらに高みということだろうか。

現在のように高純度な線材が存在しなかつた半世紀ほど前、著名なWEの絹巻き線などで使われていたのは、銅に亜鉛

積み重なつてのことだが、その間に構造や設計理念については基本形ができあがつていたわけである。それはどういふものであつたか、まず知っておきたい。

前園氏は7N、8Nといった超高純度銅線の実用化に道を拓いたことでも知られている。しかし、それだけに留まることはしなかつた。敢えて、それよりも純度の低い4N、5Nといった導体を組み合わせ、独自のハイブリッド構造を展開していったのである。純度の追求よりも、むしろこのことを重視したい。

線材にはそれぞれ固有の性質がある。このため一種類の線材でケーブルを作るよりも、それらの長所を複合することでいつそう高度な再現性を実現することが可能だ。それが、独自の経験を重ねて前園氏が到達した設計理念のひとつである。

線材をハイブリッドで使うのは、それほど単純なことではない。単に線材を撚り合わせて絶縁すれば良好な結果が得られるという保証はなく、異なる線材が混在することでかえって歪みや濁りが生じかねないのである。このためどういった構造を採るのが最善か、ジオメトリーを含めた設計全体に念入る考察を行わなければならなくなつた。

最終的に前園氏が行き着いたのは、多種線材・多種線径による複合的なハイブリッド構成で、これを多芯構造のヘリカル状に配置する、前代未聞ともいふべき手の込んだジオメトリーである。各芯線は別々の線材による組み合わせで形成され、それぞれが絶縁されて独立している。すなわちディスクリットである。

また多種線材・線径という構成を採つ

たため、その組み合わせは無限度に近くなる。最終的な決定は、膨大な試作と試聴の末に行われたということだが、いずれにしてもこれがマルチコンダクター(多種多芯構造)を形成する。

ラインケーブルを見るとよく分かるが、独立に絶縁された各芯線は、コアの周囲に螺旋状(ヘリカル)に配置されている。また相互に平行(パラレル)となつているため、これをヘリカル/パラレル構造と呼ぶ。以上3つの要素を組み合わせ、D(ディスクリット)M(マルチコンダクター)H(ヘリカル/パラレル)C(コンダクター)という独自の構造ができあがつた。これがゾノトーンの出発点であり、また完成形でもある。ゾノトーンは、最初から完成されていたというのはこのためだ。

みである。この中空パイプによる隔離構造を、新エアークラウド構造と名づけ、新DMHC構造の一環としている。

●シュプリームならではの音質の魅力
交響曲からジャズに至るまで
果れるほどに比類のない表現性

Shupremeシリーズの魅力はどこにあるのか。音がいいことは、もう言うまでもない。

試しにシンフォニーのひとつ、あるいはジャズのひとつでも聴いてみるといい。その中域から低域にかけての解像度と透明度が、どれほど隔絶したものであるか、誰の耳にも明らかであろう。その厚みが、そのまま高域までつながっている。果れるほどのエネルギーが、意外なくらいにずりりと流れて重苦しさがない。信号の通りがいい。至高の上の高みも、これ以上はないのかもしれない。